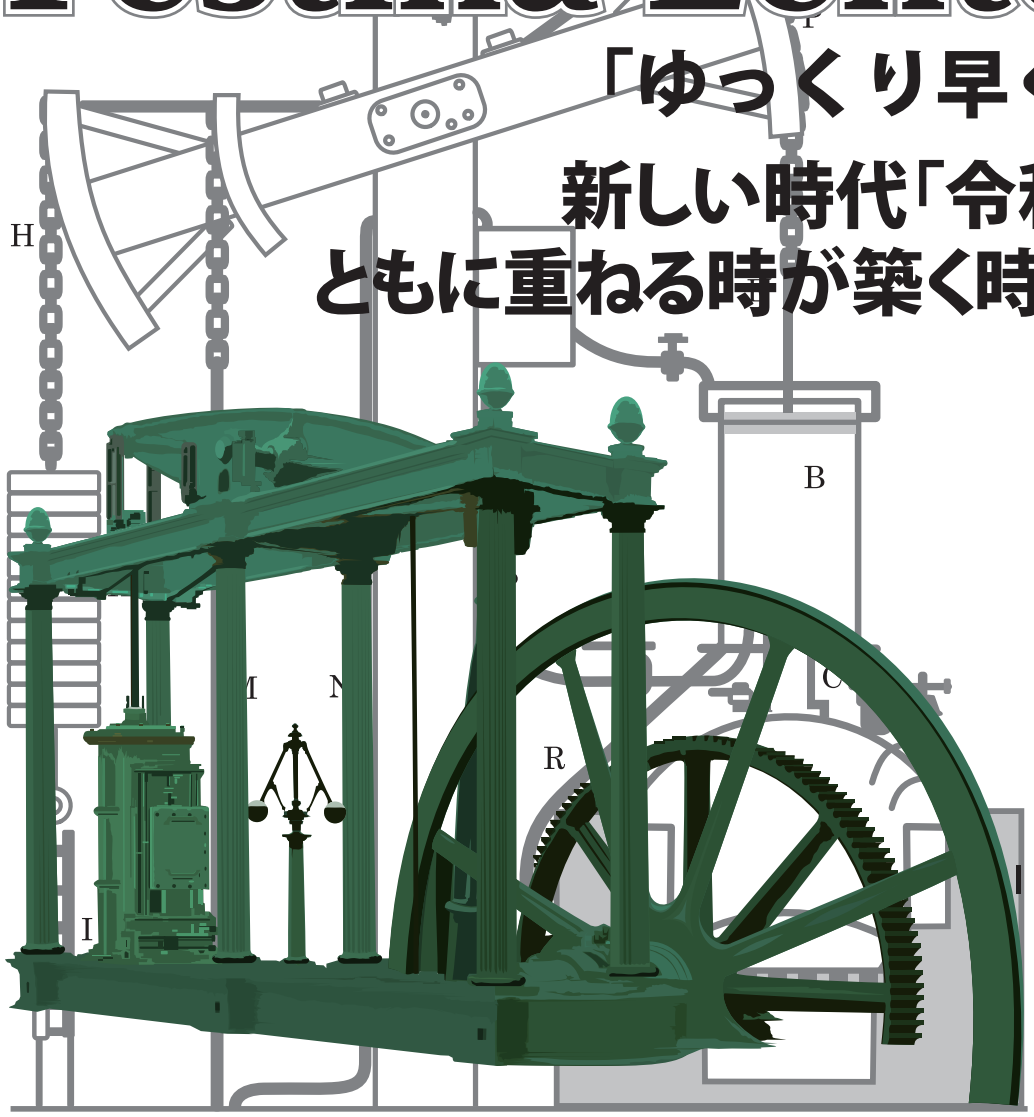
Le Monde de Keishin

Festina Lente

「ゆっくり早く」

新しい時代「令和」
ともに重ねる時が築く時代



CONTENTS

P. 2 コラム
P. 3 新しい時代に必要な二つの力
P. 4 1st Stage▌修学旅行
P. 5 3rd Stage▌修学旅行
P. 6 特集：慶進生の「時代」
P. 7 2nd Stage▌昭和と平成、新しい時代
P. 8 進学羅針盤～進学指導部から～
P.10 同期の慶進
P.12 お知らせ
小さな本箱

vol. 13
2019

慶進中学校・高等学校 〒755-0035 山口県宇部市西琴芝二丁目12-18 Tel.0836-34-1111 Fax.0836-21-7228 E-mail ks@keishin-ug.ed.jp

FESTINA LENTE「ゆっくりはやく」
新しい時代「令和」ともに重ねる時が築く時代

『ニムロッド』。平成最後の芥川賞受賞作です。主人公はサーバーのメンテナンス会社に勤め、新しく立ち上がった仮想通貨のマイニングの仕事をしています。そして、時折「駄目な飛行機コレクション」を送ってくるニムロッドと、主人公の彼女の田久保紀子を中心に話は進んでいきます。これから読もうとしている人に怒られてはいけませんから、これ以上は話しません。でも、とても個人的な感覚ではありますが、この作品、これまでの受賞作以上になんだか胸の中にすっと収まります。仮想通貨やサーバーといった最近の問題を扱っているにもかかわらず、ミーハーな感じを受けません。『苦役列車』や『火花』のように敷居の高い純文学(?)といった感じも受けません。読み進めながら「ああそうそう」という感覚や、ラストには「やっぱりそうだよね」という共感じみたものまで覚えます。

なぜこんなに親近感というような感覚をもつのだろう。答えは雑誌に掲載された著者の対談にありました。著者は私と同い年の同性でした。作品中に出てくるニルヴァーナだけでなく、対談中に出てくる『ドラゴンボール』や『沈黙の艦隊』、学生時代の過ごし方など全部が全部「そうそうそう」というものでした。同じ時代の同じ空気を吸っていたからこその共感です。

今、日本は新しい時代を迎えようとしています。著者や私などの世代にとっては「昭和」「平成」に続く新しい時代です。慶進生にとっては「平成」が終わり、初めての改元です。この元号というもののよい点は、「昭和」という時代は、「平成」という時代はというように、我々が共有できるイメージを持つことができることでしょう。西暦だけを使用している国ではそうはいきません。もちろん「昭和」も「平成」も長い時間で一緒くたにはできません。でも、我々はなんとなく「昭和」「平成」という時代のイメージを持っています。そして、慶進生は新しい時代のイメージを創っていく世代です。それはまったく新しいものから生まれるものではありません。前述の私たちのように同じ時代を生きた者同士がもつ共感のように、同じ時代を生きた世代が新しい時代を作るのです。Festina Lente「ゆっくりはやく」歩んだ時間が時代をつくります。そこで、本号では慶進生が共有する「平成」という時代、そして慶進生の新しい時代の希望を、慶進生の世界「Le Monde de Keishin」としてお伝えいたします。

表紙絵「蒸気機関」
ワットが作成した複動作蒸気エンジンの後期のものです。1850年にロンドンで製造され、現在はマドリード工科大学のロビーに展示されています。ワットによる蒸気機関の改良が産業革命を推し進め、人類は新しい時代に歩みを進めました。

6年中高一貫教育
英知を尽くし、未来を切り拓く。

慶進では生涯にわたって役立つ学力を身につけるために、6年間を2・2・2の3つのステージで構成しています。勉強のおもしろさを知ることから始まり、生徒たちが主体的に学習に取り組み、学内外の様々な体験活動で、豊かな人間性と、ともに生きる力を育み、次世代のリーダーとなる人材を育てます。

1st Stage	2nd Stage	3rd Stage
基礎学力養成期	実力充実期	発展応用期
中学1年生　中学2年生	中学3年生　高校1年生	高校2年生　高校3年生

新しい時代に必要な二つの力

平成三十一年二月七日、平成三十一年度慶進中学校生徒会長選挙がおこなわれ、14期生田辺こころさん（中三）が生徒会長に選出されました。新生徒会長が新しい時代とは何か、新しく慶進の制服に袖を通す16期生、そして在校生に伝えます。

生徒会長　14期生
田辺　こころ（中三）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。中学生になり、皆さんの周りの環境は大きく変化していると思います。それと共に年号は平成から新たなものに変わり、時代も大きく変化しようとしています。例えば、AIの発達です。今後10年から20年の間に、AIによって今ある仕事の約50％がなくなるといわれています。そんな変化の中で特に必要なのは、創造力とコミュニケーション力だそうです。この二つの力について考えてみたいと思います。

まず創造力についてです。私は新しいものを創造するために次の二つのことが大切だと考えます。

一つ目は、挑戦できる力です。挑戦するためには、様々なことに興味を持ち、やってみようと一歩を踏み出す力が大切です。しかし、時にはなかなかその一歩を踏み出せないときもあります。そんな時背中を押してくれるのは友達です。私が生徒会長の選挙に出ると決めるとき、最後に背中を押してくれたのも友達でした。みなさんも周りの友達や先生に積極的に相談してみてください。きっと、助けをもらいながらでも挑戦を積み重ねていくことが、自分自身で挑戦できる力を作っていくと思います。

二つ目は、アイデア力です。挑戦できる力を持っていても、新たなものを生み出すにはアイデアが必要不可欠です。しかし、アイデアはそう簡単に生まれるものではありません。そんな時大切なのは、話し合うことです。慶進では、慶進祭やスポーツフェスティバルなどの、生徒が主体となって作っていく行事がたくさんあります。そこで話し合いを重ねる中で、自分には全く考えつかなかったアイデアが出ることがたくさんあります。みんなで話し合い意見を出し合うことが、新たな発見をするためにはとても大切だと思います。そして、その発見はみなさんの視野を広げ、自分の中でも新たなアイデアを生み出せるようになっていくと思います。

次にコミュニケーション力についてです。私は、コミュニケーションをとるとき、特に相手の話を聴くことを大切にしています。当たり前のことだという人もいるかもしれませんが、これはとても難しいことだと思います。例えば、相手が述べたことと自分の考えが違う時、つい自分の考えをすぐに主張しようとしがちです。でも、まずは相手の意見をよく聞き、否定しないことを心がけています。「確かにその考え方もあるけれど、私はこう考える。」と述べることで、どちらの考え方も生かされ、よりよいコミュニケーションができるのです。また、相手が意見を受け入れて聴いてくれるという安心感があれば、それぞれが自分の主張をしやすくなり、よりよいコミュニケーションができます。16期生のみんなで、互いの考えを尊重できる雰囲気を作っていってほしいと思います。

このような創造力とコミュニケーション力を持つことは、変化していく環境の中で必要不可欠です。16期生みんなで協力し合い、時代が変化しても必要とされる人になっていってください。

16期生へのメッセージ

中学校１年１組担任
田中　祐輔
教科：社会

教科の好きなところ
歴史について考えるとワクワクするところ

6年間で16期生の絆を創ろう。大事なのはハートです。

中学校１年２組担任
河村　真二
教科：国語

教科の好きなところ
文章からいろいろな人の考え方や価値観に触れられるところ

「ことば」を大切にして、高め合える学年を作っていきましょう。

修学旅行

1st Stage

一番楽しみな学校行事は？そんな風に聞かれると、クラスマッチ、文化祭などなど枚挙に暇がないかもしれません。でも、今も昔も変わらない最高の学校行事は仲間と一緒に行く修学旅行ではないでしょうか。そんな修学旅行も今と昔ではまったく違ったものなのか。それともやっぱり同じように楽しいものなのか。慶進生と先生に修学旅行について教えてもらいました。

やっぱり東大はすごかった

僕が修学旅行で一番思い出に残っているのは、東京大学に行ったことです。東京大学では、最初に大学内にある地震研究所に行きました。そこでは地震のメカニズムや、地震を事前に予測できるようにするなどの最先端の研究についての講義を実際に受けることができました。地震のことについても分かりやすく詳しく学ぶことができたし、東京大学の教授の講義を受ける機会なんて、そうあることではないので、とても貴重な時間を過ごせました。そのあとは、慶進の卒業生の方々とキャンパス内を文系、理系、医学部の3つのグループに分かれて歩きました。僕は医学部志望なので、医学部のグループに入りました。歩いているときは、先輩に質問をすることができました。東大医学部生の話を聞けるということで、みんな興味のある質問をいろいろしていました。医学部には専用の図書館があり、先輩は住み込むくらいそこで勉強しているそうです。東大理Ⅲに受かるほどの天才なのに、そんなに勉強をするということは、どれだけ東大医学部の勉強は難しくて大変なのかと、想像すると恐ろしくなりました。先輩達と話しながら歩いている途中で、売店に寄ってお土産を買うことも出来ました。せっかくなので東京大学の消しゴムとノートを買いました。東京大学で実際に学んでいる先輩の話を聞くことにより、今まではっきりとしなかった大学へのイメージを具体的にすることができ、将来の夢に向かってもっと頑張らないといけないなと思いました。今度は学園祭に行ってみたいです。

13期生　中村　祐介（高1）

ディズニーの本当のおもてなし

私は修学旅行でディズニー・アカデミーとディズニー・シーを一番楽しみにしていました。

まず、ディズニー・アカデミーへ行きました。ここでは、コミュニケーションの大切さとおもてなしの心を学びました。ディズニーテーマパークは「青空を背景とした巨大なステージ」として運営されています。また、お客さんを「ゲスト」、働いている人は「キャスト」と呼ばれ、キャストはゲストにハピネス（幸せな気持ち・楽しい気持ち）を届ける、という理念のもとでたくさんのキャストが働いています。その理念の実現のためにはコミュニケーションが必要となります。基本である挨拶や言葉づかい、アイコンタクトがあります。また、もっとも重要とされる親しみやすい笑顔があります。笑顔でもたくさん種類があり、講師のキャストはとても表情豊かでした。

この講義を受けた後、ディズニーで班別の自由行動をできる時間がありました。その自由行動中に道に迷ってしまい、焦ってキャストに声をかけました。すると、「大丈夫ですよ。」と親しみやすい笑顔で丁寧に対応していただき、その後はディズニー・シーを満喫することができました。すべてのキャストがおもてなしの理念を理解し、実行することによってディズニーテーマパークの高品質は保たれているのだと思います。幼い子供から年配の方まで広い世代の方がディズニーを楽しみにして来て、キャストがおもてなしの心とコミュニケーションでゲストに接する。トラブルが起こったとしても最善の対応で楽しい気持ちを台無しにすることなく最後まで楽しんでもらう。これこそが本当のおもてなしだと思い、感動しました。

13期生　藏重　光希（高1）

修学旅行は一度きり

東大寺大仏殿の柱には縦37cm×横30cm横穴が空いている。身体をよじらせてその穴をくぐり抜けてから、25年がたった。四半世紀。愕然とする。

「この穴をくぐるとご利益があるそうですよ。」

「この穴は大仏さまの鼻の穴と同じの大きさなんですよ。」

ガイドさんの、後者の案内にだけ異様に喰いつき、我先にと大仏さまの鼻の穴に突入する中2の男子たち。「鼻毛」「鼻血」「じゃあ鼻栓」と盛り上がる男子を冷ややかに眺める女子。広島からやって来た罰当たりな中学生には、どんなご利益があったのだろうか。

初めて新幹線に乗り、新大阪からバスで奈良京都を巡る二泊三日の修学旅行。法隆寺、東大寺、三十三間堂、金閣寺、清水寺……その趣を味わうに足る感性などおよそ持ちあわせていなかった。それでも、法隆寺五重の塔が釘一本使わずに建てられているという話に驚嘆したし、三十三間堂では圧倒されてちょっと怖いくらいだったし、金閣寺は美しかった。夜は寝ると損する気がして、部活の先輩の恐ろしさや好きな女子について話しながら寝落ちした。

確か二日目が班での自由行動だった。事前にどこにいくか班で相談した。インターネットなど存在しない時代、頼れるのは教科書や資料集だけ。今からすれば不便だと思われるだろうが、それが当たり前の時代。未知の領域は広く、そこによくわからない期待感があった。

予定していた最後の行き先は清水寺だった。集合時間に間に合うかどうか怪しいけど、みんなで走ることに決めた。清水寺が観たかったわけではない。清水に辿り着きたかったんだと思う。それはもはやRPGの試練のようなもので、必死で走った。きつい坂道をみんなで走った記憶、それが一番鮮明かもしれない。

あれから何度か京都を訪れ、「ああ、ここ中学のとき来たなあ」とその時にだけ蘇る記憶。その感じが、悪くない。もう二度とくぐることができそうもない小さな柱の穴が、修学旅行の唯一性を物語っているように思う。

国語科　古川　義郎

※慶進中学校・高等学校の修学旅行の詳細は本校ホームページをご覧ください。

3rd Stage

海外で感じたコミュニケーション

修学旅行は、学んできた英語を生きた英語として使うことのできるとても良い機会だったと思います。

現地では班別行動が多く、自分たちで行きたい所を決め、調べて、時間通りに行動しなければいけません。日本でさえ知らない場所は緊張するのに、まして海外の知らない所を歩くのは、予定通り上手くいくのか常にドキドキしていました。その中でも、一番不安に感じたのはシンガポールに入国する時です。一人一人パスポートを提示し、指紋認証をしてゲートを通るのですが、私の前の人が質問を受けていて、すごく慌てていました。それを見て私も心配になり、先生や友人に助けてもらおうと思いましたがそれは出来ません。全てを自分の責任でしなければならないからこそ、嫌でも英語を使わなくてはいけない。そんなことを実感した瞬間でした。

マレーシアの学校訪問の際には、英語を話す上で大切なのは、単語や文法だけでなく、自ら積極的に話そうとする気持ちなのだと感じることもできました。人見知りで英語があまり得意でない私が、「このゲームをやりたい」「あれを見たい」など自分の気持ちを伝える努力をしたら、現地の学生さんは丁寧に教えてくれ、とても嬉しく思いました。拙い英語であっても一生懸命に耳を傾けて理解しようとしてくれた学生さんに感謝するとともに、とても貴重な体験となりました。

この修学旅行を通じて、間違えても、分からなくて、単語を言うだけでもいいから、何かを話してコミュニケーションを取ろうという意志が大切なのだということを学ぶことができました。

11期生　三隅　莉子（高二）

初めての海外は最良の学びの場

今回の修学旅行が初めての海外旅行でした。そのため、修学旅行前は初めての海外旅行が待ち遠しい気持ちと共に、初めての体験に対する不安がありました。しかしながら、実際に行ってみると凄く良い所で、何の不安も感じることなく全日程を楽しむことができました。マレーシアの学校訪問で出会った人たちや、お店の店員さんなど、様々な場面で接する機会があった人たちも、フレンドリーな方ばかりでとても充実した体験になりました。

私たちが修学旅行で訪れたマレーシア・シンガポールは、どちらの国も多民族国家です。一つの国の中に様々な宗教の建物があり、色々な民族、宗教の人がいました。学校訪問を行ったマレーシアの学校でも、中華系やマレー系、インド系などの様々な民族の学生の方がいらっしゃいました。街中でも学校内でも共通して、違う民族、違う宗教であっても、互いを尊重しあって生活しており、民族や宗教間の隔たりなどは見受けられませんでした。このことからシンガポールやマレーシアに住んでいる人々は色々な宗教の違いや、習慣の違いなど、多様な価値観を認め合って暮らしているんだなと実感しました。

私は日本に暮らしていて、多民族国家の国々のように様々な習慣や宗教を持った人と出会う機会は多くはありませんでした。日本とは違った習慣や価値観を持った人と関わることを意識したこともあまりありませんでした。今回の修学旅行を通じて、自分自身の価値観を大切にしつつ、自分とは違った様々な価値観も知り、尊重していくことはとても重要なことで、これからの社会を生きていく上で必要不可欠なことだと強く思うようになりました。

日本ではできない貴重な体験ができる良い機会なので、後輩の皆さんにも充実した修学旅行にしてもらいたいと思います。

11期生　原　みなみ（高二）

修学旅行は数学だ

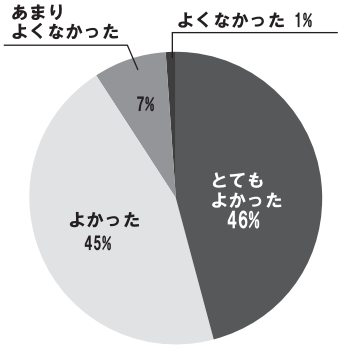
高校修学旅行のことを書くぞーと思うがなかなか思い出はでてこないので、まずは思い出せそうなことから書きます。高校時代の思い出は部活の柔道です。あるテレビ番組で見たメジャーリーガーの言葉'A winner never quits'を心の支えに、毎日の部活では得意の内股に磨きをかけ、部活後はベンチプレスの回数を友人と競い合い、家でもひたすら'勝つため'に筋トレをしていました。

高校時代は部活と勉強で毎日が瞬く間に過ぎて行きました。さて、本題に入ります。昭和から平成に年号が変わった高校2年の夏に平成初の修学旅行で東京に行きました。自身初の飛行機搭乗と新幹線乗車でした。都内自由行動では、初の山手線乗車で、3分おきに来る電車を見て、なぜこんなに次々に電車が来るのか？普段乗車率の低さと1時間待ちの不便さに快適さを感じない路線を目の当たりにしていたのでカルチャーショック。原宿では、行列に並びクレープを食べ、東京の食べ物の美味しさに、サプライズ。当時、原宿には芸能人が次々と店をだしており、芸能人の店でグッズを買いまくりました。さらに出来たての東京ドームに移動し、12球団全ての応援バットを買い、両手に大きな荷物を持ちホテルに帰り、荷物が増えてパニック。すぐにフロントからダンボールで家に送り、物流に感謝。友人と考えた計画で一日を無駄なくたっぷり東京を満喫できました。学んだことは、①ある条件下での公共交通機関の快適さ②行列と美味しさの関係③物流による時間と空間の関係などであり、初めての東京は私に実社会における、時間と空間と経済の関係を教えてくれました。あれから29年の時が流れ、私は実社会に役立つ、時間と距離と速さの関係を教えています。修学旅行から、数学的なものの捉え方を学び、その楽しさに惹かれたのですね。

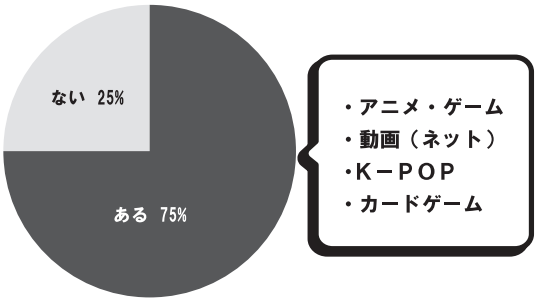
数学科　早川　武

特集 慶進生の「時代」

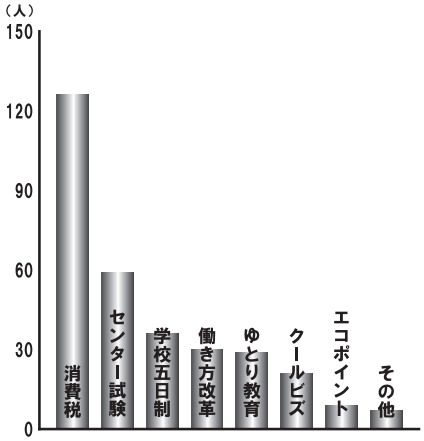
平成31年5月1日に改元が行われます。昭和から平成に変わってから30年、我々は新しい元号とともに新しい時代を迎えることになります。そこで、平成とはどんな時代であったのか。平成生まれの慶進生にとって平成はどんな時代で、新しい時代はどんな時代になるか、慶進生231名にアンケートを実施しました。



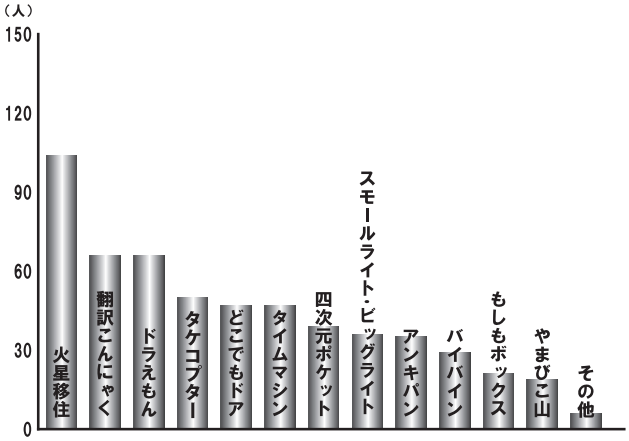
Q あなたにとって「平成」はよかったですか？



Q「平成」にはまったものはありますか？



Q 生活に大きく影響した制度は何ですか？



Q 次の時代に実現すると思う技術は何ですか？

時間は財産

14期生　伊藤　岳（中三）

いつの時代であっても日々何かが成長しています。成長しない時代など過去にも未来にもないでしょう。

平成という時代は、テクノロジーがもの凄く成長したことと異常気象や自然災害が多かった時代だと思います。

特にスマートフォンやＡＩの誕生は、僕たちの生活に大きな影響をもたらしていますが、これらは、正しく使えば本当に便利なものですが、使い方を間違えるととても恐ろしい物でもあります。そのことを理解し、危機感を持ち自ら考えて管理していかなければならないと思います。

次に、多くの犠牲者も出てしまった異常気象や自然災害。今やどこで起きるか分からない災害に、一人一人が日々、備えておかなければなりません。

しかし、そんな不安なことばかり考え悩んでいては時間がもったいない。「時間は人生での最大の財産だ」その時間をどう使うかはあなた次第。僕はその時間を自分のためだけではなく、誰かのためにも使いたいと思います。未来は不安と考えるのではなく、自分から明るくしていくものです。さあ、皆さん。皆さんは自分で考え、行動しなければいけません、この限られた時間をどう使いますか？

2nd Stage

昭和と平成、新しい時代

今回の特集は「慶進生の時代」です。そこで、「昭和」「平成」「新しい時代」はどんな時代なのか。平成生まれの13期生原颯(高二)と昭和生まれの数学科笹川剛先生にお話をうかがいました。

Q. 「平成」ってどんな時代？

原　平成15年生まれの僕が感じることは、IT関係(スマートフォンなど)の技術が進歩していった印象があります。他は、福祉の機能だったり、社会的な機能が進歩していったと思います。

笹川　生まれが昭和で、中学生の時に平成に変わりました。物心ついて、楽しく過ごしていた時代が私にとっての昭和時代。高校生、大学生、社会人…これまでの自分の人生そのものが平成と言っていいですね。大学で勉強し、その後社会に出て、仕事を覚えて、いくつかの仕事を経て、慶進に来て今年で12年目になるので、非常にいろんなことがありました。自分にとっても、変化が大きかった時代だなと思います。

Q. 「昭和」ってどんな時代？

原　すごく娯楽に溢れているイメージがあります。新しいことが増えていき、それに対し問題もあったと思うけど、その時代の中でそれを解決してどんどん先に進んでいった。熱い感じを昭和から受けます。例えば当時のバラエティ番組です。「たけし城」であったり…。

笹川　何で知ってるの!?見たことあるの!?

原　見たことはないですが、親からすごく言われるんですよ。あーいう番組は予算つぎ込んで、面白いものを追及しているので特化した感じがします。

笹川　私にとっての昭和は、自分自身がまわりからの刺激を受けて成長させてもらえた時代と感じています。今、原くんの話の中で、「熱い時代ですね」と話があったのですが、確かに僕自身もそういう風に感じる部分もあります。小学生までは、勉強であったり運動にしても一つのことに特化して、「一生懸命頑張る」という過ごし方ではなかった気がします。中学生になりハンドボールを始めて、二つのことにまわりの友達と真剣に取り組み、結果的に全国大会に出ることができたので、自分自身の中でも熱い時代でしたし、個人的ではありますが、納得ができる時代でした。

Q. 「新しい時代」ってどんな時代？

原　平成の初期から少子高齢化と叫ばれ、解決できなかったのが一番大きな問題だと思います。それを次の時代で解決して、マイナスを良い方向へ進めていってほしいと思います。決して平成のすべてが悪いわけではなく、問題を後回しにしているところを解決してほしいと思います。

笹川　今、本校に在籍している中学生や高校生であったり、大学で勉強している卒業生、社会に出た卒業生たち、そして新しい時代から本校で勉強し、今後、社会に巣立っていく人たちが、新しい時代を担っていくはずなので、すごく期待が持てます。その一方で、自分自身の立場としては、これまでと同じ様に色々な環境であったり、可能性を生徒と一緒に見たり感じたりしていき、新しい時代に対応できるような仲間の輪ができていってくれたらいいと思います。

Q. 慶進の「新しい時代」は？

原　すでに新しい時代に向けての教育を始めていると思いますが、これからの時代、どういった人材を求められるかというと、ワールドワイドに活躍できる人材だと思います。時代が進むにつれ、世界とのつながりが強くなる一方ですし、自分にしかできないことを増やすのも大事だと思います。世界には才能を持った人がたくさんいる中、埋もれないよう、自分の良い所を伸ばしていく教育をしてもらいたいです。

笹川　原くんと重なる部分がありますが、「二つの価値観にとらわれない」、ということが、これからの時代、より大事になっていくと思います。先程言った通り、仕事をいくつかしてきましたが、今の時代になって改めて感じることは、自分だけの価値観とか、自分が置かれている環境だけでの価値観にとらわれるのではなく、他人の価値観を認めることがすごく大切な時代になると思います。

Q. お互いどんな印象を持ちましたか？

原　価値観の話があったように、時代の流れを見て来られた笹川先生の言葉、相手の価値観を認めてあげられる、そういうことが大切だと、僕には重みがあると感じました。

笹川　僕は逆に、さすが高校生と思いました。今日、原くんの話を聞き、高校一年生、多感な時期であり、色々なことを聞き、考えることができる時期だと思います。色々なことに対し、自分の意見を自分で考え、きちんと持っていると、改めて感じさせられました。

2人の話から慶進の新しい時代への光が見えてきました。
新しい時代の慶進が楽しみです。

進学羅針盤

大学入試は、現高校二年生の入試から大きく変化します。まだ不確かな部分も多くありますが、選抜方法の変化・問題形式の変化・ポートフォリオとよばれる自分の活動履歴書の提出などです。ほんの少しではありますが、これらのことに焦点をあて、考えてみたいと思います。自分のこととして真剣に考えるきっかけにしてほしいと思います。

思考型小論文に挑戦

問題です。
この四コママンガは何を問題にしているのでしょうか？

この問題について、現高校一年生四人にも話し合いをしてもらいました。その話し合いの流れや内容を参考に、これから変わる入試に対応できる力を身につけていきましょう！

何に対して笑っているのかが重要

小山　凌央

自己中心的なのが問題？

町野　絢加

はっきり言うことも必要

佐伯　颯

相手を気遣うことが必要？

光永　優希

ポートフォリオとは!?

新入試に伴って、調査書に加え「活動報告書」を提出するようになります。

従来型の入試では、大学は「調査書」を通して皆さんの高校三年間を知りました。

調査書には次の内容が箇条書きや簡潔な文章で記されます。

・教科目の三年間の成績（五段階評定）
・出欠席の記録
・部活動の記録
・生徒会活動の記録
・ボランティア活動の記録
・受賞の記録
・行動所見　など

特別な活動や受賞がなければ「特記事項なし」です。

新入試で必要になる**「活動報告書」は生徒自身が自分で**書きます。先生は「承認」するだけ。そのために、活動の記録をデジタル上に残していくことが必要

みんなの疑問

四コマ目の人はなぜ怒っているのだろう？

光永　言葉づかいが悪いの？

佐伯　テレビの話で、おもしろがって人のことを馬鹿にしてるからいけないってことかな。

小山　藤野君が面白いことを言ってるのなら笑っても大丈夫だけど、そうじゃないなら問題かもしれないね。
雨が降ってるのに、一人だけ傘さしてないよね。

光永　齊藤君は傘に入れてほしいんじゃない？

佐伯　あ、そういうことか。

町野　ひとりだけびしょぬれになってる。

小山　傘に入れてあげたらよかったんだよ。

佐伯　雨が降ってるのに齊藤君は濡れてるよね。

町野　自己中心的なのが問題ってこと？

光永　気を遣うことが必要だったのかな。

佐伯　傘を一人しかさしていないことに違和感あったよ。冷たいなと思った。

小山　もう一人のほうが、自分だけ傘を持ってるのに相手が濡れてるなら入れてあげたらいいよね。

町野　私も傘忘れたとき、入れてもらったけど、せまくて結局出ちゃった（笑）

光永　自分だったら、一緒には入らない。友達は入れてくれようとするけど、申し訳ないから目的地まで走る！

佐伯　ほかにも問題があるよ。傘に入れてほしいのに相手が気づいていないなら、はっきり言えば入れてくれるよ。

■ 話し合いの中で出てきた三つの問題点

①その場にいない人を話題にして笑っていること
②友達が、傘がなくびしょ濡れになっているのに、知らぬふりでいること
③してほしいこと（あるいはほしくないこと）をはっきり言うこと

漫画の中で、「藤野君」は自分だけ傘をさして、「齊藤君」はびしょ濡れになっています。そして「藤野君」も「齊藤君」も楽しそうに笑っていて、そのことを特にヘンだとは思っていません。そこからは、「個人がお互いに自分の義務しか果たさない個人主義社会で、人の面倒を抱え込まないのが当たり前」という社会が透けて見えます。

さらに「空気を読みすぎて自分の主張したいことが言えず、不満があっても笑顔で問題にしない社会」ということも読み取れるかもしれません。答えはひとつだけとは限らないのです。

新入試では次のことが求められます。

- 絵やグラフなどの資料を読み取る**思考力**
- 必要な情報を選ぶ**判断力**
- 自分の言葉で解答を**表現する力**

従来は推薦・ＡＯ入試などで小論文試験が課され、これらの力が必要とされていましたが、これからは皆さんこのような思考型の問題に取り組む必要があります。

になります。皆さんはこれから**「ポートフォリオ」を作成**し、三年間の活動を記録していくことになります。

例えば、部活動で県大会や全国大会に出場し、勝敗に関係なく、**「自分が部活動を通して何を学び、どのように成長したか」**ということを大学に向けてアピールすることができるのです。つまり大学は、入試の点数で学力を知ると同時に、**調査書とポートフォリオを通して、皆さんが高校三年間でどのように成長したのかを知る**ことになります。

これから重要なことは…

☆高校一年生から活動の記録をポートフォリオに残しておくこと

☆「アピールできる自分」を持つこと

校内にある掲示板には、様々なコンクールや講演会などのお知らせが掲示されます。積極的に参加し、可能性を広げていきましょう。

SERIESⅨ The Talking with schoolmate...

平成30年度卒業 10期生の慶進

今から約三年半前、川上中学校で行われた秋季体育大会を思い出します。10期生が出場した最後の公式戦です。試合結果は残念ながら一対二で敗戦となりましたが、とても印象に残っている試合です。森山くんがロングシュートを決めたこと、山本くんがフォワードとしてボールをあきらめず追いかけ続けていたこと、井上くんや、河﨑くん、中村くんがチームのために最後までしっかりと声を出し続けていたこと、米原くんの最後のスライディング、篠澤くんが急遽キーパーとして試合に出場したこと…書き出すときりがないですが、この試合にはこれまでの10期生と歩んできたサッカー部としてのすべてが詰め込まれていたように思います。

サッカー部は、「礼儀、ルールを守る、文武両道」の三つを部則とし、「明るく、楽しく、元気よく」をモットーにして、日々部活に取り組んでいます。これは僕がサッカー部の顧問となって今までずっと変わらないものです。そして、何よりも大切にしているのが「ハート」です。サッカー自体は上手くなくても、一生懸命チームのために、仲間のために最後まであきらめずに頑張る姿勢を一番大切にしています。部活動がただスポーツの技術の向上を目指すのではなく、人間力を培う場として「ハート」のある大人になってほしいと思って、日々指導に当たっています。

10期生は部員も十四名と他の学年に比べて多く、その分チームとしての絆も強い学年でした。先日行った卒業生を送り出すOB戦では久しぶりに10期生全員が集合しサッカーをしました。動きのキレは中学校時代に比べて劣っていましたが、チームとしての絆、仲のよさは当時のままで、これが慶進サッカー部だなと改めて感じることができました。

これから新たな場所での生活が待っている10期生のみなさん、サッカー部を通して育てた強い「ハート」を胸に、頑張ってください！

国語科　河村　真二

まずは未来の話からしましょう。なぜみなさんはその学科を選んだのですか？

河﨑　医師になって色々な人を助けたいと思っていたからです。

例えばどんな人を助けたいですか？

河﨑　病気に困っていて、いつも不安でいるような人を助けたいと思っています。

中村君はどうですか？

中村　まず生き物について幼いころから興味がありました。高校では生物を選択したのですが、その時に再生医療というか幹細胞、ｉＰＳ細胞や、ＥＳ細胞のことを学びました。そして幹細胞を使った再生医療を使えば肝臓移植問題とか、臓器をそのまま再生できればそれを解決できると思いました。それを様々な他の医療に応用できたらきっと多くの病気が治り、助かる人が増えるのではないかと考えてみました。そこでそれを研究したいと思い山口大学医学部医学科を志望しました。

山本君は？

山本　自分は中学生のころから建築士になるという夢がありました。それをずっと貫いて、この六年間過ごしてきました。京都に決めた理由は、京都にいい建築物がたくさんあることと、慶進から京都大学の理系への進学者がいないということで、自分が一人目になりたいという憧れもあったのでこの大学を選びました。

みんなそれぞれ思いがあるわけですが、大学に進学して、勉強に限らずどんなことをしたいと考えていますか？

河﨑　高校時代は部活をやっていなかったので、何部に入るかはまだ決めてはいませんが部活に入って色々な人と関係を持ちたいと考えています。

中村君はどうですか？

中村　怜音君と一緒で、高校では勉強ばっかりやってきたので、運動部に入りたいです。今のところ考えているのはフットサルなんですけど、入部してまた精神を鍛えようと思っています。

山本君はどうですか？

山本　自分は、やっと建築の勉強というのができると思っているので、大学でも勉強が楽しみです。あとは、京都なのでお寺とか神社を回りたいと思っています。

日本の建築物が好きですか？

山本　日本もですし、将来は留学とかして世界の建物も見たいと思っています。

今回のテーマは「時代」です。平成という時代が終わって新しい時代になっていきます。みなさんにとって、慶進の六年間というのはどんな時代でしたか？

河﨑　僕は、六年間すごく楽しめたと思っています。やっぱり、慶進以外では同じ体験は絶対できないと思うし、この慶進に入って楽しい体験ができて本当によかったと思っています。

一番楽しかったと思うものは何ですか？

河﨑　高校二年の修学旅行が楽しかったです。

中村君、みんなはどうですか？

中村　普通なら中学・高校と三年で変わる友人関係ですが、自分たちは六年間同じ学年約七十人でやってきて、この中高一貫でなければ体験できないような深い絆を築きあげられたことは、この六年間で一番大きなことで貴重な六年間だと思います。

山本　自分も同じような感じで、この三人は中学の頃から生徒会も一緒だったし普通に遊んだりもしたので、やっぱりそれは中高一貫だからこそできたことで六年間だから普通の高校生の友達関係とは違う別のものができたのではないかと思っています。友達関係とかだけではなくて、勉強とか夢に向かって六年間まっすぐ突き詰めるというのも慶進ならではと思っています。そういう色んな意味での六年間は慶進という僕の中でひとつの時代になっていると思います。

では、後輩にメッセージをお願いします。

中村　最後まであきらめずに「初志貫徹」で頑張っていけば必ず夢は叶うと思うので最後まであきらめないでください。

山本　夢を決めるというか、進路とか自分の目指すものを決めるのは早ければ早いほどいいです。自分の最初に選んだ道がしっかり考えて選んだ道だと思うので、揺るがないようにまっすぐ突き進んでいくことがやっぱり夢への一番の近道だと思います。

河﨑　一生懸命努力することは、結果はどうあれ人生にすごく大事な分岐点になると思うので一生懸命悔いのないよう努力してください。

最後に、大学はどんな時代にしたいですか？

中村　今までは色んなことを吸収するだけの立場だったと思うのですが、大学では今まで吸収したことをアウトプットしていって、社会に貢献というか、今までお世話になった方々に恩返しをしていきたいと思っています。

山本　大学では高校とはまた違った視野が広がると思うので、そういう大きな環境の中で夢を追い続けたいと思います。

河﨑　僕は大学でしかできない授業などをたくさん学び、経験して、社会に出ても恥ずかしくないような時代にしたいです。

また数年経過して、その大学がどんな時代だったかの話ができるといいですね。

平成30年度 大学合格実積

中高一貫コースの主な合格先（　）は医学部医学科　3月27日現在

東京大学	2名	山口大学	11名(6)
千葉大学	1名	九州大学	2名
京都大学	1名	早稲田大学	2名
神戸大学	1名	慶應義塾大学	1名
大阪大学	1名	上智大学	1名
広島大学	1名	コロンビア大学	1名
ワシントン大学セントルイス校	1名	カリフォルニア大学ロサンゼルス校	1名

※詳しくはHPをご覧ください。 http://www.keishin-ug-ed.jp

お知らせ

■平成31年度 行事予定

6月22日(土)	学校説明会①
7月13日(土)	学校説明会②
8月25日(日)	学力診断テスト
10月19日(土)	入試説明会①
11月16日(土)	入試説明会②

慶進でお会いするのを楽しみにしています。

La photo de Keishin

変わっていく時代に 変わらない場所で

～「吾が琴芝の学び舎に」～慶進中学校・高等学校は、前身校の創立以来、ずっとこの琴芝の場所で、たくさんの学生とともにたくさんの学びを育んできました。校舎は新しくなり、昭和、平成、そして次の年号へと時代は移り変わります。しかし、どの時代でも、この場所から生徒たちが眺めた琴芝の風景は、大切な青春のひとときの風景として心に残っているのではないかと思います。

第12回　小さな本箱

英語科　末冨めぐみ先生のおすすめ

食堂かたつむり

小川　糸

皆さんは、ごはんを食べる前に「いただきます。」食べた後に「ごちそうさまでした。」といつも言っていますか？この『食堂カタツムリ』は、当時話題で表紙がかわいらしかったのでなんとなく買った本でした。そんな本が、現在に至るまでこんなに自分の思考に影響を与えるとは思ってもいませんでした。

主人公は、料理がとても上手な女性で、恋人が突然、家財道具全部を持って去ってしまったところから物語が始まります。傷心の彼女は、昔飛び出した実家へと戻り、そこで「食堂かたつむり」を始めます。その食堂は、完全予約制、一日限定一組。一人ひとりの客の思いや願いを大切にし、心を癒してくれる不思議な食堂でした。ただ、客にとっては魔法のような料理も、実際は主人公が、考えに考え、客にとって本当にこれが正解なのか？自己満足になっていないだろうか？と、不安と戦いながらつくっているものでした。そんな主人公の優しさが、不思議なスパイスとなって、料理を客にとって最高のものにしているのだと思います。それぞれの料理の描写が本当においしそうで、読んでいて幸せな気分になります。そんなほんわかした物語で終わるのかな、と思って読み進めると、後半はかなりショッキングな展開になっていきました。

「今、目の前にある食べ物すべてに命があった」ということ、その「命」を我々は「いただいている」ということ、「決してむだにしてはいけないということ」を筆者の小川さんは伝えてくれています。最後のほうは少しこわいところもあるので、苦手な人は読み飛ばしてもかまいません。ただ、筆者の思いは感じてほしいな、と思います。私自身食べ物の好き嫌いが多いほうで、この本を読んだ後、猛省したことを覚えています。

ありがたいことに現代は食べ物やモノにあふれています。でも、そのことを当たり前と思わずに、それが含む命や心に感謝しながら生きてほしい。その命も心も皆さんの一部となって未来につながっていきます。そうして皆さん自身が大切な存在となっていくのです。

さあ、今日も元気に、「いただきます！」